

学校における「教育的関係」の再構築に関する実践的考察 —他者との係わり合いを深める実践例—

水戸市立緑岡小学校 教諭 折本正巳

21世紀を目前に控えた現在、教育界は大きな転機を迎えている。社会は急速に変化し、人々の生活様式も物質的な豊かさに支えられたものとなった。しかし、一方では、青少年の問題は深刻となり、学校現場でも、いじめ・不登校・学級崩壊など課題が山積している。これらの課題を解決し、21世紀を希望ある時代としていくことが教育に携わる者の役割であるが、実際に学校現場で子どもたちと接している教師にはどのようなことができるのであろうか。現在の諸問題の根底には、人間関係の崩壊が一つの大きな原因として存在する。そこで、教師と子どもの関係、子ども相互の関係、子どもと家庭の関係について再考し、その在り方を再構築していく必要があると考えた。その第一歩として、これまでの私の実践を振り返ってみたい。

キーワード：教育的関係、日記指導、一枚文集、学級通信、係活動、生い立ちの記

1 子どもと教師の係わり合いを深めるために

(1) 新採教師の日記指導を通した子どもとの係わり合い

以下の実践記録は、私が新採1年目(昭和62年度)の時にに行った実践を、新採2年目にまとめたものである。現在読み返すと、実践の中身に対してかなりの反省を感じるとともに、まとめた内容についても捉え方が不備であることが分かるが、そのまま掲載する。なお、文中及び資料に出てくる子どもの名前は仮名にした。

＜日記が教師と子どもの対話の場となった例 ～亮君から学んだこと～＞

亮君は、一見してスポーツマン。体はしっかりしていて、体育は得意。とても負けず嫌いで、やたらと勝敗にこだわる所があるので、私にはそこがとても気になっていた。

ところで、私は、小学校・中学校と、体育はほとんど門外漢だったので、その影響から体育の指導に自信がなかった(現在でもそうではあるが)。特に、児童たちの間で人気のあるバスケットボールは、ルールさえほとんど分からなかった。5月に6年生どうしの校内試合があったが、その時ルールが分からないまま審判をして、児童たちに軽蔑された経験も、私のバスケットに対する自信をいっそうなくさせていた。

2学期も終わりに近づいたある日、体育の時間にバスケットを行った。例によって、私は審判をしたくはなかったのだが、シュート練習だけでは児童はおさまらない。しかたなく笛を吹くことにした。バスケットの審判をした人なら分かると思うが、ファウルでも、トラベリングでも、「あっ」と、思った瞬間に笛を鳴らさないと、試合はどんどん進行してしまい、結局、見逃してしまうことになる。その日もそうであった。「ファウルかな?」と思っても自信がなかったり、ルールをよく知らなかったりしたため、ほとんど笛を吹かなかった。応援している児童の、「今のトラベリングだよ」などといった声は、私に対する皮肉のようにも聞こえて、いっそう弱気になると共に、腹立たしくもあった。そうして、ほとんどルールのない試合が終わった後、亮君が私の所にやって来た

のである。

「先生、なんで、あきらかにファウルなのにとらないの？」

私は、「先生は、ルールをよく知らないんだよ」とは言えなかった。また、逆にそんなことを言ったら、児童の信頼がなくなってしまうとも思った。さらに、最近反抗的な態度をとるようになっていた亮君が、私の欠点をついてきているような気もした。それで「時間が3分しかなかったから、あきらかにファウルのもの以外はとらなかったんだよ」などと、もっともらしい返答をして、その場をしのいでしまった。

次の日、また体育があった。バスケットのリーグ戦の試合もまだ少し残っていた。「また審判か」と思った時、「そうだ、子どもにやらせればいいんだ。そして、自分は試合に参加していない児童たちを見ていればいい」という考えが浮かんだのである。そこまで思うと、昨日の事を思い出す。「そうだ、亮君に審判をやらせて、どんなに審判が大変か教えてやろう」そう思い、亮君に笛を押し付けると、亮君は「やだよ」と生意気な（私にはそう聞こえた）態度をとり、さらに言う、笛を放り投げてしまったのだ。ここまでくると、私も頭に血が上ってしまい「なんだその態度は」と、怒鳴って、結局審判をさせてしまった……。

私は、その時間が過ぎると、亮君のことは忘れてしまっていた。亮君は問題児ではなかったし、スポーツマンタイプだから、少しぐらい強い指導をしても大丈夫だろう、と思っていたのだ。その上、私には、まだまだたくさんすることがあったから。

そんなことがあってすぐ、資料1に載せたような日記があがってきたのである。今まで、ほとんど日記をあげない亮君が、ノートに自分の気持ちを、おもいっきりぶつけてきたのだ。当時、私とぶつかる事が多く、気持ちが荒れているのは、分かっていた。このまま、チャレンジに載せたのでは、単にお母さんを困らせるだけになってしまう。返事を書いて、返したところ、次の日、とても長い日記が書いてあった。お母さんの文も添えて。(資料2)

読んだ瞬間、頭をガーンとやられたような気がした。私は、自分の勉強不足からくる腹立たしさを亮君にぶつけていただけなのである。それも、そうすることが(審判をさせることが)亮君のためになるんだと都合のいい解釈をして。

私の強気な指導は、亮君には通じなかったのである。スポーツマンタイプには、強い指導をすればついてくると思ったのは、とんでもない間違いだったのだ。さっそく、昼休みをつぶして返事を書いた。赤ペンをぎっしり書く事によって、いくらかでも気持ちを分かってもらおうと、できるだけ長く書いた。今読み返すと、かなり苦しい言い訳もあるが、とにかく、私が亮君をいい加減に思っているのではないことを知ってもらいたかった。(資料3)

掃除が終わって、いつものように日記のノートなどを児童が配っている時、私は亮君に日記を手渡した。亮君は、友人の所に行き、「俺、今日の日記見るのが楽しみなんだ」と言って、ノートをこっそり開いたようだったが、すぐ閉じてしまった。たぶんその場では読めないと思ったのだろう。

次の日、日記に「いろいろほくのこ、どうもありがとう。たんきなので、なおすように努力します」と書いてあった。それを見たとき、うれしかった。というより、ほっとした。やっぱり、赤ペンを長く書いたのが良かったのかなあ、と思った。

数日後、授業参観があった。「アンリー・デュナン」を読んだ感想を発表してもらおうような授業だったと思う。「感想をノートに書いてください」と言って、期間巡視をしてみると、亮君だけノートに感想が書いてあった。今日の授業のために、家で書いてきたのだという。うれしくて、一

番最初に指名した。授業が終わってから、亮君のお母さんと話をした。

「昨日の夜、一生懸命感想を書いているから、きっと先生指名してくれるよ、と言ったんです。そしたら、先生俺の事なんか何とも思っていないから指名してくれないよ、って言ってたんですけど、指してくれたんで良かったです。」

「日記、お読みになりましたか。」

「はい、涙がでました。」

その時、教師をやってて、初めて認められたような気がした。よかったな、と思った。今思えば、教師として最低の指導をしていただけなのに……。

それから半年、6年生になった亮君が、バスケットの時間、こう言ってくれた。

「先生、バスケットの審判、手伝わせて下さい。」

思わず、胸が熱くなった。亮君は現在でも、私が最も信頼している子どもの一人である。

資料1 亮君の日記

口げんか

ぼくは、げんかんでくつの土をほろって、学校にいきました。かえってきたら、「りょう、げんかんで土をほろっていったの。人のくつの中にはいったんだよ」ぼくはいいました。

「ぼくがトイレに入っているとき、みさはドアをたたいていたんだよ」といいました。

「だけどかんがえてみな。妹のこと朝なかしていったんじゃない」

「それは、みさがドアやらなければよかったんじゃない」

と、いいつつ、けっきょくは、ぼくのことだけをおこって、みさにはおこりませんでした。ぼくは、いっしゅん、くそばあだと思いました。

●チャレンジにのせてください。そうすれば、お母さんだって、ぼくにいうはずですのでおねがいします。

【赤ペン】

① お母さんは、なぜおこったんだろうね。

- 1 亮君がにくいから
- 2 亮君がいなくてもいいから
- 3 ただ、だれでもよかった
- 4 亮君に良い子になってもらいたいから

○をつけてみて下さい。

② 最近、先生とも、いろいろぶつかっていますね。なぜでしょう。

- 1 先生は亮君がきらいだから
- 2 先生は亮君をどうでもいいと思っあきらめているから
- 3 先生は亮君を期待しているから

○をつけてみて下さい。

チャレンジにのせるのは、○をつけてくれてからにします。

○をつけた理由もほしいな。

註)チャレンジとはその時の「一文集通信」の名前。

折本：学校における「教育的関係」の再構築

資料2 亮君の返事とお母さんからの便り

※次の日、亮君は次のように○をつけ、日記に返事を書いてきてくれた。

①の質問に対しては ほく⇒2 (母⇒4)

②の質問に対しては ほく⇒2

また、お母さんも、私あてに文章を書いて下さった。

①の理由

ほくのことだけおこって、みさに、おこらないから。

②の理由

先生はおしつけはいけないといっているのにたいして、ほくにはバスケのしんばんをおしつけているから。それに、ほくらのしあいだったから、よけいにやりたかった。

①のつづき

あさ、ほくが、トイレにはいつているとき、みさがさいしょにやって、ほくが、たいたたらかたんにないてしまった。それで、みさがいないのを見て、ほくにやつあたりをした。ただ、かたんにあやまってがっこうにいった。かえって、はなしあいがはじまって、おかあさんがトイレにはいつているとき、戸をけつとばしてやった。はなしあいがはじまって、「こういういみでけつたんだよ」

といって、戸をけつとばしたら、戸がこわれたので、おかあさんはほくのことをなぐつた。けつきよくは、みさのことはおこらなかつた。

②のつづき

ほくは、バスケをやりたかつた。そのわけは、みつひさ君らとたたかいたかつたから。それにほくらのチームの試合のことを、わかつていながらほくに、しんばんをやらせた。あと、この前、体育館でやつたとき、先生は、あたりまえだという反則をとらない。試合時間三分しかないからミスとらない。そうしたら、時間かんけいなく反則をきちつとつたほうがいと思う。

●先生になおしてほしいこと

あたりまえのことをきちつとつてほしい。とくに**体育のこと**！

女の子のことに、はなすのがしつこくない。ほくたちのことだけ、しつこい。

たつたそれだけです。

お世話になっています。二学期になってから、体あたりでこられるので、少々手をやいています。話をしてみると、言葉づかいや暴力で行動しますので誤解されるようです。本人にすると結果だけで言われたりするのが(もちろん大人もそうですが)苦手のようです。自分には兄貴がないので、体あたりして、少し大人になったような気持ちで話をしているところがありますので、どうぞ、長い目でよろしくお願い致します。

もう少し、心を大きくもつて成長してほしいのですが、五年生ですので余裕がありません。でも、じっくり話すときは「はっ」とする言葉もできますので、それなりに、亮なりに考えているようです。親バカかもしれませんが、いつもではないので、どう扱つていいか相談に行ったほうがいいのかなど、亮とも話していました今日この頃でした。やつと、日記もかくようになったと思つたら、親との口げんかでした?!何やら反発ばかりで、他の子に影響がなければいいのですがね。どうですか?私も家にいて、食事のときなど、ちょっとした言葉で、今日の態度などを察すると、ちょっとそれは、とか口だしするので、本人は「まずいことしゃべつた」という感じで話し始めます。でも、言葉遣いが悪いときは、私も注意しますので、今後ともよろしくご指導下さい。

乱筆文にて失礼します。

S62.12.17

資料3 担任から亮君への返事

亮君へ

なぜ、しんばんをさせたかという、前の日に、「しんばんが見てなければ、何をしてもいい」と言ったからです。しん判だって、いっしょうけんめいやっているんです。いっしょうけんめいやっているのに、スポーツ選手が「見てないからいいや」と思ったら、しん判はどう思うでしょう。その気持ちを知ってもらいたかったからです。亮君たちの試合があることを知っていたと書いてありますが、頼んだ時は知っていませんでした。その後、試合を確認した時に、ある事は分かりました。その時の対戦相手、小村君たちの班は3人しかいないと言っていました。亮君たちの班は6人いたようなので、亮君が「だれか他の人にかえて」と言ってこなかったの、いいかなー、と思ってだまっていました。その時、もう少し考えればよかったですね。ごめんなさい。

バスケの反則については、トラベリングの事を言っているのですか？もしそうなら、トラベリングについては、よく見ていなかったからです。先生も「あれっ」と思ったのですが、はっきりしてなかったの（先生の不注意で）ピーとならませんでした。先生の決断力のなさが原因です。ごめんなさい。ファールに関しては、とてもびみょうなので、亮君に言ったとおりです。時間がなかったの、本当に危険と思うものしかとりませんでした。（もちろん、見ていなかったのもあると思います）。亮君が言うように、体育の時は、時間がなくても、きちんととるのが本当だと思います。これからは、もっともっと細かく勉強して、とるようにします。ありがとう。

「押しつけはいけない」という意味は、亮君たちがいやだと思った事をさせてはいけないという事ではありません。それは、先生は、亮君の事を考えてやっているからです。最近、五年二組の、特に男子は「自由」と「自分勝手」をまちがっています。自分の好きな事だけをやっているはずはないでしょう。それをよく分かっていない人が多いのです。先生が思うに、亮君がいやだったらば、

「ほくは———なので、しんばんはいやです。」

ときちんと話すべきだったと思います。それを、笛をほおったりして……。確かに先生の言い方も悪かったと思います。その事はあやまります。

女子にはしつこくない、と言いますが、男子たちの方がおこられる回数が多いから、よけいそう思うのかもしれないね。ただ、先生は、やっぱりいつも注意している人たちを期待しているから、ついつい本気になってしまう事が多いと思います。特に、亮君はスポーツマンだと思っています。先生もそうでした。だから、よけいにいろいろ要求してしまったかもしれないね。

これからも、要求は続けようと思います。もし負担になったら言って下さい。方法をかえてみます。いろいろ先生に言ってもらって、先生もとても反省しました。これからは、もっともっと勉強して「亮君の先生だった」と胸を張れるようがんばります。

お母さんへ

毎日、いたらない指導しかできず申しわけありません。今回の事で、私自身、大変勉強になりました。今後ともよろしく御指導の程、お願いいたします。

折本 正巳

(2) 日記指導を通じた実践を振り返って

子どもと教師の人間関係を深めるためには、日記指導以外にも、日常生活での声かけ、休み時間に一緒に遊ぶ、個人的な悩みの相談にのる、計画的な面談を行うなど様々な方法があり、実際の学校現場では、これらのことを複合的に行っている。このような中で、日記指導ならではの良さを考えてみると、直接言いにくいことでも日記を通してなら言い合える、子どもも教師も冷静に考えて

対話ができる、という点に大きな価値があるといえるだろう。実践記録の中でも、亮君は自分の正直な気持ちを日記を通して私に伝えてきたのであり、私も冷静に亮君の言葉に耳を傾け、自分自身を反省することができたのである。

また、ここでは、母親も日記を通して対話に参加しており、子ども・親・教師の三者が日記を通して人間関係を深めることができた点も見逃せない。今改めて実践記録を読み返すと、亮君の純粋さと同時に、お母さんの果たした役割の大きさを痛感する。自分の子どものことを真剣に考え、担任と子どもの間をよりよい関係にしていきたいと願った、お母さんの素晴らしさに感動を覚えるのである。

現在は、子どもも教師も多忙になり、放課後などに直接ふれあう時間が十分とれなくなっている。それにもかかわらず、子どもと教師の係わり合いの重要性は増している。そうであれば、間接的な係わりではあるが、日記指導の持つ意味は大きくなっているといえるだろう。

2 子ども相互の係わり合いを深めるために

昔は、子どもは誰とでも仲良くなると言われたものであるが、現在の子どもはあまり友達づきあいが得意ではない。特に、係わり合う友達の少なさや、係わり合いの表面化が気になる。しかし、人間は他者と係わり合いながら成長していくのである。格家族化、塾通い、遊びの個別化などにより、他者と係わる経験が希薄になっている現在の子どもたちにとって、学校、とりわけ学級における相互の係わり合いを促進するために、教師が何らかの手立てを講じる必要があると考えた。

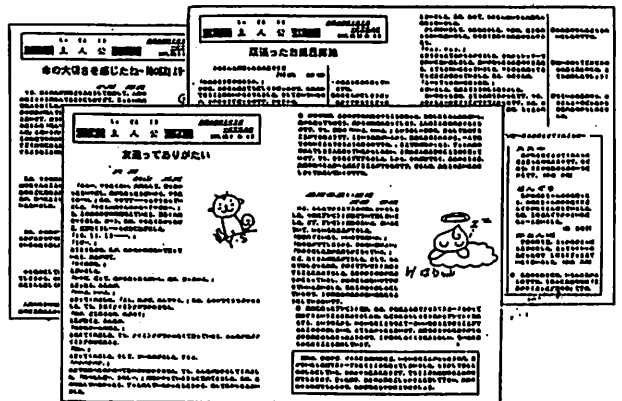
(1) 「一枚文集通信」の発行と学級での読み合せ

新採から現在まで、子どもたちが書いた文章を中心に構成した学級便りを発行してきた。子どもの作文を中心とした、いわゆる一枚文集の要素と、教師の文章を中心とした学級通信の要素の両方を合わせているので、私は「一枚文集通信」と読んでいる。(資料4)

B4の用紙に、3人程度の子どもの日記文・教師のコメント・子どもの描いたイラストで構成してあるのが基本形であるが、学級全員の一言、授業の様子紹介、模範となる作文、教師だけの文章などで構成される場合もあり、紙面はそのつど自由に変化する。

文章を書いた子どもの名前を載せることを原則としているので、掲載文の選択の際は配慮をするとともに、子どもの側とも、名前を載せてほしくない場合には日記に×をつけるといった約束をしてある。配布をする際には希望者が音読し、その後、学級全体で話し合いを持つ場合もある。

この「一枚文集通信」の発行と学級での読み合せには、



- ・ 普段あまり話をしていない友達の考え方や趣味や特技を知ることができる。
- ・ 仲の良い友達の違った一面を発見することができる。
- ・ 担任の考え方や人柄を知ることができる。
- ・ 学級全体で読み合うと、とても和やかで良い雰囲気となる。

といった効果があり、子どもの相互理解を促進し、学級のまとまりを作るのに大変役立っている。また、この「一枚文集通信」は、子ども相互の係わり合いを深め、互いに高め合う関係を作るという役割も担っている。友達の文章を読み合うということは、

- ① 友達の行った活動や心の動きについて知る。
- ② 自分の心の中で、あるいは実際の会話で、友達に共感したり反論したりする。(対話する)
- ③ 対話を通して、その体験の持つ意味を考えたり、自分の考えを深めたりする。

という流れをとることで、自分の考えを深め、自分を成長させる係わり合いとなるのだ。

例えば、友達の日記文をもとに以下のような考え方をした子どもの文章を「一枚文集通信」にのせることで、さらに別の子どもも考えを深める機会を得ることができるだろう。

<人のことを考えて>

今日、道徳で『兵十のいないごんぎつね』というところを勉強しました。最後に「のぶお君は、ぎ音係をやっているとき、どう思ったでしょう」というのを、みんなで考えました。一番近いのは、「ほくだったらこうやるのになあ」でした。私は、すごい人だな、と思いました。

帰りの会の、先生のお話のとき、先生がふと小松さんの方を見て、重ねてあるうちの一番上ののっている日記帳を取って、

「読んでいい？」

とか、聞いていた。小松さんは、初めは首をふっていました。後の方でなっとくしてくれたらいい。先生は、少し悲しげに、題から、

「かわいそう。」

と読んでいった。聞いているうち、だんだんきのうのことが、おもいうかんできた。

「私も言おうとしましたが、なぜをひいて……。」

というところで、はっとしました。「小松さんは、やさしいんだ。」と思いました。「A君とか、本当の名を書かないでいてくれるし、自分も、しずかにしてあげたら、と言おうとしたなんて」そう思って、小松さんの日記を聞いて、すこしたって帰りました。

帰り道で、私はずっと考えていました。

「私だったら小松さんみたいに“しずかにしてあげたら”とか言う勇気なんか、なかっただろう。私は“なんで富田さんが言うの？学級委員でもないのに”とか“これは富田さんが言うことじゃないでしょう”とか、そういうもんくが返ってくるかもしれない、と思って言わなかった。あのとき言っていたら、もんくを言われるかもしれないけど、しずかになって、権田さんらしくに、帰りの会をすすめていただろう。私は、つまり、自分のことしか考えていなかったんだ。」

こう考えながら、だまって家に入って、少しボーッとしながら思いました。

「人のことを考えて行動すれば、自分だけのためじゃなく、みんなのためになるんだ。これからも、できるだけ、人のことを考えて……。」¹⁾

この例ほど明確ではなくても、友達の考えや感動が書かれた文章は、どれも自分の考えを深める要素を持っており、「一枚文集通信」を読み合うことは子ども相互の高め合いに役立っている。

さらに、「一枚文集通信」を読んだ保護者が、「昨日の我が家は仕事などで遅い食事でしたが、食後突然、姉が『主人公』を音読しました。皆、感動でした。涙あり、笑いありの豊かな感性をわけていただきました」という感想をよせてくれたり、また別の機会には、ある保護者の書いた文章を載せることができたり、保護者会で「私は〇〇さんの書く文章が好きなんですよ」といった話題がでたりするなど、「一枚文集通信」は家庭と学級をつなぐ役割も果たしている。

(2) 個性を生かす場としての係活動の在り方

子ども相互の係わり合いを深めるためには、子どもたちによる自主的・創造的な活動が有効である。これらの活動は、子どもたちが直接的に係わり合う機会を多くするだけでなく、個性を発揮し、相互に高め合う場を作り出すからである。

自主的・創造的な活動をする中で、子どもは自分の良さを十分に発揮し、時にはそれまで気づいていなかった自分の能力を発見する。また、自分が外界に働きかけているという実感や、他者の役に立っているという気持ちを持つようになる。これらのことで、子どもは自己有能感を育て、自分に対する自信を深めることができるのだが、自分に対する自信を深めた子どもは、他者の良さを肯定的に認めることができるようになり、お互いの良さを自分の成長に生かす係わり合いを築けるようになるのである。そこで、一人一人の個性を自由に生かせる係活動に注目し、実践を行った。

係活動の特徴を「必ずしも存在しなくてもよいが、あればより学級集団作りに役立つもの。子どもの創造性が生かされやすいもの」ととらえ、ノートの配布などの決まりきった仕事は当番制として交替で行うこととした。係によっては、当番制にすべき内容も兼任して行う場合もあるが、基本的には創造的な活動を中心に運営することとした。係の種類や数、メンバー構成はそのつど話し合いで決める。係の名前も子どもたちの発想を生かしたものにした(例：福祉係→愛の天使たち)。教室に係活動コーナーを作り、係ごとの新聞や作品を自由に掲示するスペースを確保した。画用紙やマジックなども自由に使えるよう準備した。

【係の種類と活動内容の例】

学習係・・・学習の要点を掲示物にまとめる。学習プリント作成。(宿題の提出状況調査)

思い出係・・・クラスの出来事や思い出を、毎月模造紙などにまとめ掲示していく。

福祉係・・・朝の会等を利用して、クラス全体に手話を教える。目隠し歩き体験などの企画。

インテリア係・・・イラストを描き壁や柱に掲示するなど、教室の飾り付けを行う。

イラストコンテストの実施。

※その他、将来の夢係、図書係、新聞係、生き物係、レク係など。

この係活動を子どもたちはアイデアを生かしながら、楽しく行った。特に、多少わんぱくだが工作の得意な子が、「僕は修理係をしたい」と申し出て、友達や学級の物を修理する役割を果たすなど、個々の特技を生かして学級のために活躍することができた点が良かった。

また、イラストコンテストやチャレンジランキング大会、転入生を迎える会など、係が主催して学級行事を行う場合もあるが、このような行事は、子どもの相互理解を深めたり、一人一人の考えを深めたりする機会にもなっている。次の日記文は、福祉係が企画した体験学習後のものである。

＜利き腕が使えない不便さ＞

今日、福祉係が企画した「おたすけ大会」で目の見えない人がどれだけ苦労しているかを知るため、目かくしをして校庭を一周しました。平らな所を歩いているのに、階段から落ちそうに感じてとても恐かったです。障害を持っている人はこんなふうに苦労しているのかなと思いました。

家に帰ってから、私は利き腕が使えないとどれだけ不便かためてみました。右手にマンガの本をあてて、包帯とタオルで手をぐるぐる巻きにして、使えないようにしました。その状態を30分間続けることにしました。制服をハンガーにかけようとする、いつもは簡単なのに、うまくかかりません。スカートがはずれたり、上着がちゃんとかからなかったり……。ハンガーをかけ終わって、今度は4年生の教科書を読み始めました。片手ではうまく支えられなくて、イライラしてきました。次は、算数のプリントをやり始めました。左手で書くので字はヨレヨレで、自分でも何と書いたのか分からないぐらいです。8問解いたところで、右腕が使えない不便な30分が終わりました。片手しか使えないとこんなに大変です。

両手を使えることは当然だと思って、片手しか使えないとどれだけ大変かなんて考えなかったけれど、両手を使えることは、とてもいいことなんだと思いました。²⁾

その他、福祉係の子どもが「知り合いから車椅子をかりてくるので学級で体験したい」という提案をし、そのことがきっかけとなって、体の不自由な小学生本人とその母親が、学校に来て話をしてくれることになった例もある。この時は、学年全体で『道徳の授業→車椅子体験学習→お話を聞く会』という流れで学習を行うことができ、思いやりの心を育て、生き方について考えを深めるよい経験となった。

係活動は、どの子も必ず持っている自分ならではの個性を生かして、学級文化を創造するものであると考えられるが、同時に、一人一人の自分に対する自信を深め、お互いが認め合い高め合う関係を築くことにも大変役立っている。

3 子どもと家族の係わり合いを深めるために

最近、親子関係の難しさが話題となることが多く、「今の子どもは昔とは違う」などという言葉聞くこともある。果たして本当にそうなのであろうか。ここに小学5年生の作文を掲載する。

僕の将来の夢は、料理人になることです。決して、家が料理店だからではありません。小さい時はなりたいものがたくさんあったけど、今では料理人になりたいと思っています。

僕はお父さんが料理を作っている姿を見て「かっこいい」と思います。でも、料理人になりたいのは、かっこいいからではありません。本当は、お父さんが一生懸命やっているからです。何を一生懸命やっているかということ、例えばコンピュータです。お父さんはコンピュータなどを買って、何時間もかけて料理のしおりみたいな物を作っています。また、毎日、夜中に料理を作ったりしています。このことが分かったのは、ある日の夜中でした。たまたま起きてみるとお父さんがいなかったのです。どうしたのかと思って厨房に行ったら、お父さんが料理を一人で一生懸命作っていたのです。

お父さんは、毎日毎日いろいろ大変なことをやっているのに、全然疲れた顔を僕に見せません。だから、僕は大人になったら料理人になり、お父さんの努力を無駄にしないようにしたいです。みんなが心から「おいしい」と喜んでくれる料理人になりたいと思います。³⁾

折本：学校における「教育的関係」の再構築

この作文からは、純粋な心で父親の姿をとらえ、尊敬の念をいただき、自分も将来父のような生き方をしたいと願った子供の心がよく伝わってくる。父親が一生懸命仕事に取り組んでいる姿や、家族をととても大切に思っている様子を目のあたりにして、自然と生き方を学んでいるのだ。

このような作文を読むと、親が子どもに与える影響の大きさを今更ながら実感することができる。また、簡単に「子どもは変わった」とは言えないことにも気づく。現在の家族の問題は、子どもの変貌が原因なのではなく、お互いにどう接していいか分からない、受験や生活態度に関することばかりが会話の中心となっているといった、関係作りの難しさや、関係の在り方に起因する問題なのではないだろうか。

子どもにとって、家族との係わりが、基本かつ重要であることは昔から変わらない。しかし現実には、この関係は希薄になる方向に進んでいる。このような状況を考えると、子どもが家族との係わり合いを深めるために、学校が多少なりとも手立てを講じることは意味のあることになる。

中学2年生を受け持った時に、生き方学習としての進路学習を、年間を通して学年全体で行ったことがある。「ふるさとを見つめ直す」「職場体験学習」「高校生を囲んで」「生い立ちの記」「立式」を中心とした学習であったが、その中で、自分が生まれた時や、小さかった時の事を家族などに聞いて作文にする「生い立ちの記」がとても心に残った。

苦しめて、苦しめて、苦しめて、苦しめぬいた結果、元気なうぶ声とともに、ひたいにあざを作って、私の命の時計は、時を刻み始めた。……(略)……私の名前には、名前を見て読みやすく、誰にでも覚えてもらえるように、誰からも愛される思いやりのある子に育ててほしい、という願いが込められているという。しかし、親の願いとはうらはらに、子供というのは薄情なものだ。今、十四歳の私は、素直でもなければ、思いやりもない。わがままな娘に育ってしまったようだ。分かっていたら直せばいいが、それがそうもいかないから大変だ。中学生としてこの世に存在していること、うれしいこと、楽しいこと、苦しいこと、悲しいこと、すべては両親が与えてくれていることだ。感謝しなければならないことだろう。しかし、そんなことはこうして作文を書きながらも頭では分かっている。だけど、行動はともなわないのだ。反発、反論の繰り返し。時々、心が痛くなる。今回、作文を書くに当たって、母子手帳を開いてみた。今でも変わらないわがままさはこの頃からであることが分かる。こんなことまで書いてあるとは。いろいろと細かい記録がされている。どれだけ私を心配し、大切にしてくれていたかが、なんとなくだけけど分かりかけてきた気がする。『

「生い立ちの記」は、思春期という多感な時期ならではの感受性で自分と親の関係を見つめ直す良い機会となったが、これ以外にも、子どもと親の係わり合いを深める活動はたくさん考えられる。特に、完全実施が目前にせまった総合的な学習の時間は、子どもと親だけでなく、子どもと地域の人々との係わり合いを深める学習として定着する可能性を十分に持っている。今後は、家族そして地域の人々の、生き方や人生観に触れられる学習の実現を目指したい。

4 学校における「教育的関係」再構築の方向性

以上、学校における「教育的関係」の再構築を追究していく第一歩として、これまでの私の実践を振り返ってみた。最後に、今後の「教育的関係」の再構築の方向性について、私なりの考えを簡単に述べてみたい。

教師と子どもの関係は、お互いが影響しあいながら、それぞれが学びを深めていくというものであると捉えたい。もちろん、教師が子どもに与える影響の方が、その逆よりもはるかに大きいだろう。しかし、教師は大人であり人格が完成している存在であるとか、教師だけが知識や技能を所有しており、子どもはそれを授かるだけであるという考え方は適切ではない。また、教師は子どもに対して権威を持っているが、それは決して権力ではなく、子どもとの信頼関係の上に成立する尊敬の念から生じる権威であるということも忘れてはならない。

子ども相互の係わり合いは、子どもの成長に必要な不可欠のものである。学校という場所に同世代の子どもと一緒に学んでいる意味は、単に教授行為の能率を高めるためのものではない。子ども一人一人がそれぞれの個性を発揮し、お互いに認め合い高め合う関係を築くためである。そして、このような集団の在り方は、やがて子どもが大人になった時、実社会でより良い集団を築き上げていく上で参考になるだろう。

子どもにとって、家族や地域社会との係わり合いの重要性は、今さら述べるまでもない。本来、このことは学校が関与することではないのかもしれないが、現在の日本の状況をふまえ、子どもたちの将来を考えると、このまま何の手立ても講じないわけにはいかないだろう。そこで、学校が子どもと家族・地域社会の関係をより良いものへと築き上げるために、一石を投じる役割を担う必要があると思われる。

教師であれ、子どもであれ、親であれ、人間相互の係わり合いの根本は、愛情と信頼に基づき、お互いを高め合う関係である。このことを次の世代に伝えるために、私は、教師として、大人として、これからも研究を進めていきたいと思う。

【註】

- 1)高萩市立松岡小学校4年2組一枚文集通信【チャレンジ】第102号(H2.2.8新)より。
- 2)水戸市立緑岡小学校5年3組一枚文集通信【主人公】第10号(H10.5.1新)より。
- 3)水戸市立緑岡小学校5年2組一枚文集通信【主人公】第55号(H10.1.22新)より。
- 4)平成6年度茨城町立明光中学校進路学習・「生い立ちの記」より作品の一部抜粋。

【主な参考文献】

- 高久清吉【教育実践学—教師の力量形成の道—】教育出版, 1990年。
内田伸子【子どもの文章—書くこと・考えること—】東京大学出版会, 1990年。
佐伯胖【「学ぶ」ということの意味】岩波書店, 1995年。
佐伯胖/藤田英典/佐藤学【学びへの誘い】東京大学出版会, 1995年。
明石要一【戦後の子ども観を見直す】明治図書, 1995年。
大平健【やさしさの精神病理】岩波書店, 1995年。